

シベリア体験記

静岡県 今井一成

北滿の黒河の街に着いたのは十二月初日であった。総勢四百人程度の奉天編成の第五十八大隊は、満州国の諸官庁勤務の者や、奉天在住の隣組の者などによる強制留者が多く、兵役に直接関係のない一般在留邦人との混成であった。着せられた軍服にも階級章等ももちろん皆無であった。隊の編成も適宜に行なって二か月余りも動かずにいた。その間に逃走を実行して失敗した者が何人かいた。

十二月四日となり、黒龍江の結氷の状態を見て、氷河の上を歩いてソ領ブラゴエに渡った。装備も悪く、酷寒の氷風に吹かれて、早くも凍傷になった者がいた。シベリア鉄道の無人駅マルタにて貨車を降り、半地下室の古い兵舎を片づけて、木の枝を床に敷いて押し重なって入った。これからの責苦を背負わされた不運な者同志、

いずれも無言のままであった。

その後は分散して幕舎の日々となり、伐採道路に丸太を敷きつめ、この道路を中に右と左に別れ、山を切り開くための伐採作業が始まった。木を倒す者、山出しの者、積み荷の者と分け、最終には四キロくらいまで幕舎を移動し、伐採しながら進んで行った。三、四か月も入浴はなく、シラミは取りきれないほどについた。一年くらの間に大方の者が栄養失調となり、作業場や日ごろの生活中に死んで行く者が増してきた。寝たまま死んでいる同僚を何人か見た。

マルタの収容所は地獄谷と言われ、このラーゲルから生きて帰るのは大変であった。ノルマができず、朝六時に起き、夜の十時まで伐採現場で働かされたことが何日もあった。シベリア線に貨車が入ると、夜中の一時でも二時でも積み込み人員の使役が出る。やっと十時過ぎに寝て、使役の都合で二時に起こされるときもあった。酷寒の深夜作業に倒れた者もいた。食う物もろくに食わず、ノルマに酷使されて、これで生きていけるわけがない。裸にして土葬にした者の数はわからないほどにあ

る。

伐採は用材六メートル半、薪が四メートル半にきまっていた。倒した木を検査し、それに焼き印を打つ。そのまま二、三日は置いてあるので、歩哨のいない間に盆切りをする。焼き印の部分を薄く切り取り、用材をわからぬよう移動させて、前日のものを今日のノルマの中に入れるのである。このノルマの盗み取りは毎日ではできない。

班内で食事の分配に口争いがあるので、細い棒で秤をつくり、飯盒を二個つり下げ、中身を等分にして分配したことがあった。パンが大きい小さいとあって、あれを切り、これに加えてと、食事当番は平均をとるのに苦労した。山の収容所では、そのころ、食事の量にノルマ給食があった。ノルマの量により食事の分量が違ったがソ連のやることには反対が多く、直ぐとりやめになってしまった。酷寒には山の草もなくなり、赤松の上皮をとり、青い中の皮を煮て、その汁を吸った。ネズミを食った。焼き肉は美味であると思った。

製材所にては、近在の女の労働者がいて、これらとと

もに働かされた。工場の薪が燃えないとエンジンが止まり、機械もとまるので、その間休むことができる。新運搬の者がわざと燃えにくい生木を運んでいっては、機関士に怒られていた。

イルクーツクの収容所に転属となり、拾い食いができるようになって、少しく息をつくことができた。腰に缶詰の缶を下げ、何でも拾って入れて置き、持ち帰って食ったり、くれたりした。マルタ、パタルウイハ、イルクーツクと三つのラーゲルを渡り歩き、なれたところに自分一人が同僚と別れることがあって、これがつらかった。

満州国の官使であったために捕えられ、二年くらいの間までは時折取調べがあった。これも身の不運と何事があったも諦めてきた。人間の極限の生活をおのれ自身も強いられ、多くの同胞の死もこの目で確かに見てきた。取り返すことのできないシベリアでの辛苦の体験を折々に思い返している、四十余年の歲月は余りにも遠くなっている。